

校長室より

第31号

「天空高き」



平成24年2月10日

『冬』の語源は「殖ゆ」にあるそうです。「殖」の字には、生物が「ふえる・そだつ・しげる」、などの意味があると言われています。自然界の、とりわけ植物は、人の目に触れずとも、凍てつく大地の下で地下茎を拡げ、春になると芽を出し、やがて花を咲かせ我々の目を楽しませてくれます。冬を越えるからこそ、美しく大きく成長するのです。

今年の冬は例年以上に厳しい寒さが続きます。それだけに春の足音が待ち遠しいですね。

## デジタルよりもアナログ？



人生を面白くする一つに、友達関係があると思います。

皆さん、友人と呼べる人達は何人いますか。携帯に優に百人を超えるアドレスがあるかもしれません。でも、それは真の友達でしょうか。

ネットで知り合った友達に、困っていることや悩んでいることなどを相談できますか。単に面白おかしいことの情報を得るだけの関係ではありませんか。

日常的に顔を合わせ、表情の変化から心の内を読み取り、言葉や仕草から相手の癖を知り、共に汗をかいたり涙する。その中から「信頼」という、付き合っていく上での宝物を得なければ、本当の人間関係は生まれてこないのではないのでしょうか。私はそう思います。

皆さん、今までの人生を振り返ってみて、学校で楽しかったことや嬉しかったことは、どんな時で、どんなことでしたか。

私の場合、そこには友達や先生が必ずいました。皆さんも楽しいと思えるのは、周りに友達がいるからではないですか。友達のお陰で嬉しいと感じると思うのです。逆に、自分がいるから友達も楽しいと思えたり、嬉しいと感じたりしていると思います。

生涯の友は、身近な人間関係を大切に、アナログ的な交際から生まれてくるのではないのでしょうか。少なくとも携帯やネットなどのデジタルな人間関係からは真の友は得られないと思います。

失敗は挑戦者のみに許される勲章である 元日野自動車社長 蛇川忠暉

天空高き 第30号』を読んでの感想をF1-3からいただきました。ありがとうございます。  
その中からある生徒の一文を紹介します。

2011年は大震災でたくさんの人々を失いました。自然の力はとても怖いもので、私達から大切なものをたくさんとっていきました。

それでも日本のみんなは前を向いて頑張っています。なぜ、あんなに頑張れるのか、私はふと考えました。

たぶん、みんながみんな、思いやりを持っているからだと思います。

だれかが泣いていたら、だれかが「どうしたの？」と声をかけるように、相手の気持ちを考えられる優しさを多くの日本人は持っているのだと思います。

だから、前に進めているのだと思います。みんながみんな、自分勝手にやっていると、この国は成長しない気がします。今、こうして成長しているってことは、みんなが周りのことを考えて頑張っているからだだと思います。

自然が起こした地震や津波は私達に悲劇をもたらしたけど、その反面前に進む勇気や希望をくれたのだと思います。だから私もそんな前を進む強さをいつか手に入れたいです。

その先生が五年生の担任になった時、  
一人、服装が不潔ふけつでだらしく、  
どうしても好きになれない少年がいた。

「母親が病気で世話をしなければならず、  
時々遅刻する」  
と書かれていた。

中間記録に先生は  
少年の悪いところばかりを記入するようになってい  
た。  
ある時、少年の一年生からの記録が目止まっ  
た。  
「朗らかで、友達ほがが好きで、人にも親切。  
勉強もよくできて、将来が楽しみ」  
とある。

三年生では  
「母親の病気が悪くなり、疲れていて、  
教室で居眠りする」

三年生の後半の記録には  
「母親が死亡、希望を失い、悲しんでいる」  
とあり、  
四年生になると

間違いだ。他の子の記録に違いない。

「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症とな  
り、子どもに暴力をふるう」  
先生の胸に激しい痛みが走った。

先生はそう思った。

だめと決めつけていた子が突然、  
深い悲しみを生き抜いている生身なまみの人間として

二年生になると

自分の前に立ち現れたのだ。

先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、  
あなたも勉強していかない？  
わからないところは教えてあげるから」

少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日

少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続  
けた。

先生の胸に顔を埋めて叫んだ。

「ああ、お母さんの匂い！

きょうはすてきなクリスマスだ」

六年生で先生は少年の担任でなくなった。

卒業の時、

先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、  
今まで出合った中で一番すばらしい先生でした」

それから六年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。

僕は五年生で先生に担当してもらって、  
とても幸せでした。おかげで、奨学金をもらって  
医学部に進学することができます」

授業で少年が初めて手をあげた時、

先生に大きな喜びがわき起こった。

少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。

少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。

あとで開けてみると、香水の瓶だった。

亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。

先生はその一滴をつけ、

夕暮れに少年の家を訪ねた。

雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、

気がつくど飛んできて、

十年を経て、またカードがきた。

そこには先生に出会えたことへの感謝と

父親に叩かれた体験があるから

患者の痛みがわかる医者になれると記され、

こう締めくくられていた。

「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。

あのままだめになってしまう僕を

救ってくださった先生を、神様のように感じます。

大人になり、医者になった僕にとって

最高の先生は、

五年生の時に担任してくださった先生です」

そして一年。

届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」

と一行、書き添え<sup>そ</sup>られていた。

『致知』連載にご登場の鈴木秀子先生に教わった話である。

たった1年間の担任の先生との縁<sup>えん</sup>。

その縁に少年は無限の光を見出し、

それを抛<sup>な</sup>り所にして、それからの人生を生きた。

ここにこの少年のすばらしさがある。

人は誰でも無数の縁の中に生きている。

無数の縁に育<sup>はぐく</sup>まれ、

人はその人生を開花させていく。

大事なのは、与えられた縁をどう生かすかである。出典『心に響く小さな5つの物語』